

## 調査報告

### ギリシャ・クレタ島に息づくサスティナブル・ツーリズムの精神

奈良県立大学 地域創造学部  
石本 東生

本稿は、ギリシャ・クレタ島における代表的なアグリツーリズム施設『ミリア・マウンテンリトリート (Milia Mountain Retreat)』に関する参考資料である。同施設は『ナショナルジオグラフィック誌』公式ウェブサイトにて、「世界の『エコロジ』トップ10」にもランキングされているほど。事実、ギリシャにおいてもアグリツーリズムのパイオニアと評される場所であり、季節を問わず常に予約が困難な、欧州でも知る人ぞ知るアグリツーリズム施設である。

筆者は、調査のため2014年9月に13人のゼミ学生たちと共に本施設を訪れた。その上で、設立者兼オーナーのイオルゴス・マクラキス氏におこったインタビュー録音（ギリシャ語）データを、今回、調査報告資料として作成した。なぜなら、そこには何より「アグリツーリズム起業家」の気高い精神が脈打っており、「サスティナブル・ツーリズム」の観点からも非常に重要だと感じ



写真1) ミリア・マウンテンリトリートのコテージの一つ

たからである。（文責は筆者の石本にあり、掲載の全写真も、筆者が撮影）

また、この「調査報告」は、筆者が既に本学2014年後学期より「国際観光ビジネス論」の講義用資料としても使用しているものである。

(以下、ミリア・マウンテンリトリートにおける、設立者兼オーナー Mr. Giorgos Makrakis  
へのインタビュー)

**Giorgos Makrakis**

ミリアにおける私たちの父祖の歴史がこの文書の中に書かれています。(ミリアのパンフ  
レットを開きつつ…) ただここでは、私自身が見て、触れて、覚えている限りのミリアの歴  
史を語りたいと思います。



写真2) ミリア・マウンテンリトリートの一部。左の建物はレストラン、レセプション棟。右はコテージ群

私が幼少の頃、このミリアの集落に車でアクセスする道路など全くありませんでした。当時、私の家族はこの地域にかなりの規模で土地や畑そして家を持っていました。例えばオリーブ畑、栗、また様々な種類の果樹園を有していたのです。果樹園では特に洋ナシをたくさん作っていました。

私が幼少の頃、家族は既に麓の「ヴラトス」という村に生活しておりましたが、私が8歳頃の時期から両親、兄弟と一緒にこの地によく来ておりました。当時は当然毎回徒歩、あるいは荷物運搬用のためロバを連れておりましたので、ロバに乗ることもありました。1時間ほどの距離でしたが、オリーブをはじめ様々な作物を収穫するために来ていたのです。栗の時期は栗を、オリーブの時期はオリーブを…、といった感じです。すなわち、朝早くヴラトス村を出て、ここミリアで夕方まで収穫をし、そしてまたヴラトスに帰って行きました。た

くさんの収穫物がありましたので、帰りはロバに収穫物を載せるだけでなく、子供の私たちまで様々背負って歩いたものです。それも1回の往復では間に合わずに2回、3回と行き来することもありました。それらの収穫物を販売して、家族は生計を立てていました。当時はそれ以外には収入源がなかったのです。

とりわけ「栗」は高価格で良い収入源でした。その需要も多かったのです。当時、近隣の村々の農家は、殆どが「栗」で生活できていたと言っても過言ではありません。しかし、それ以外の収入源というと、野生動物を狩猟し、食肉として売るぐらいで、実にこの地域は「生産性の低い未開の地」でした。さらに、元来、野草やハーブが多く存在していたところではありましたが、山火事や野生動物による乱食が原因となり、殆ど「禿山」状態でした。

そのため、この地域の野山を豊かな植生に戻すために、ふもとの村からたくさんの野草やハーブの苗や種を持参して植えることも度々でした。その後1982年から、ミリアでアグリツーリズム、エコツーリズムを始めようというアイデアが生まれましたが、当時は誰も「アグリツーリズム、エコツーリズムは何か？」など知るよしもなかったのです。

さて、私たちの父親の世代で、ミリアの地主の一人にヤコボス・ツルナキスという男性がいました。彼はドイツに留学し、ドイツ語やドイツ文学を修め、高い教養を身に付けた人で



写真3) ホワイトマウンテン連山の山懐に抱かれる「ミリア」

した。そして留学後ハニア<sup>1</sup>に戻ってきたヤコボスは、教師となりドイツ語を教えていました。その一方で、彼はドイツでは既に産声を上げていたアグリツーリズム、エコツーリズムに注目し、そこでそれらの知識を吸収していました。その背景には、彼が生まれ育ったミリアの地で、同様なことができないかどうかを模索していたに違いありません。なぜなら彼は本当にこの地を愛していたからです。

そのような経緯から、1982年よりこの地でアグリツーリズム、エコツーリズムの拠点を作るための努力が始まりました。残念ながらヤコボスはハニアにて教員をしていましたから、常時ミリアに居住するというわけにはいきませんでした。しかしながら、当時、私自身も既に18歳になっており、かなりの重労働にも耐える体力もついていたので、この一大事業に力を注ごうと決意したのです。

最初に私たちが着手したのが、この地域の野草やハーブを食い荒らす野生動物をミリア

一帯から遠ざけることでした。つまり、山の尾根伝いに一連の有刺鉄線柵を張り巡らし、野生動物が決して侵入できないようにしたのです。

その後、ミリア・マウンテンリトリートがここまでになるには、大変長い時間がかかりました。このプロジェクトを始めた 1982 年当時は、描いた夢は大きくとも、現実にはそれを成し遂げるのに十分な資金さえ手元になかったのです。なので、私たちは手ずから、一つ一つ、一步一步、しかし着実に築いてきたのです。

2 番目に取り組んだのが、先述の通り、従来この地にあった「植生」を取り戻すため、播種や植樹を行っていました。山に植生が増えることは、この地域の生態系にも良好な働きをもたらしますし、降雨の際も地面に水分を留める保水効果アップにも繋がります。

そして 3 番目に手掛けたのが、朽ち果てた「古民家の修復・復元」です。村人が最も多かった時期は、15~17 家族くらいでしたでしょうか？ なので、60~70 人くらいの村人がいたことでしょうか。そういえば、ある歴史資料にミリアのことが書かれてあるのですが、「17 人の兵士がいた」との記述もあります。中世期に遡りますが、「1630 年にヴェネツィア軍がクレタに来た時も、既に『ミリア』の集落は存在していた」ことが確認されています。しかし、ミリア集落の起源がいつなのかを語る史料は今日まで見つかってはいません。

ともあれ、石造りの家屋ではありましたが、先祖の代から長年この地を離れていたため、当時の状況は惨憺たるものでした。そうですね、最後の家族がこのミリアの集落を離れたの



写真4) レストラン、レセプション棟にあるバルコニー。昔ながらの伝統的の石造建築を踏襲し、再生した

は、第2次大戦直後の1947年だったと覚えています。それ以前からこの地を後にする人々が多かったのですが…。殆どすべての家屋が倒壊していたような中で、小さな1件の建物だけが住める状態で残っていました。それはある羊飼いが羊の群れを率いてこの地を通るときに、一宿できるようにと手を入れてくれていたのです。

さて、その重要な「家屋の修復・復元」で私たちが使用した資材は、当時各家屋の周囲に散乱していた元の石材そのものでした。また、あちこちに残っていた家屋の石壁跡から、どのように石材を積み上げていたのか、をあらためて調べていったのです。ちなみに、それらの石材はこの地域の山から切り出されたものですが、鉄分を多く含むために「鉄石」とも呼ばれ、重くてとても固い石です。なので、なかなかめったなことでは割れません。建築資材としては最高のものです。しかしながら、逆にこれで家を建てる場合は「作業」が大変です。これらを再利用しながら、土、砂、石灰を混ぜ合せて漆喰を作り、石材を組み上げていきました<sup>2</sup>。

また、クレタでも各地域によって家屋の建築形態は異なりますが、私自身「ミリア特有の建築形態」を学ぶために、残っていた家屋の壁に強いて穴をこじ開け、どのような石組にしているかを詳細に調べました。そうすると、「必ず大きな石と小さな石が上下左右、さらには壁の内側と外側で交互に組み合わせられて並べられている」という規則性にも気づきました。ハニアの町の方から専門の大工に来てもらい、一緒にいろいろと調べたこともありましたが、殆ど私ともう一人の助手だけでこれらのゲストハウスを修復・復元していったのです。ある区切りがついたのが1991年ですが、この仕事に取り掛かってから丸9年が経っていました。

初期にはヤコボス・ツルナキスの夢と理想があったわけですが、彼は残念ながら「教員」という職務を持っていたために、週に1回程度しかこの地には来ることができませんでした。それで私は彼と密接に連絡を取り合いながら、作業を進めていったのです。

ちょうどその年、幸運なことに

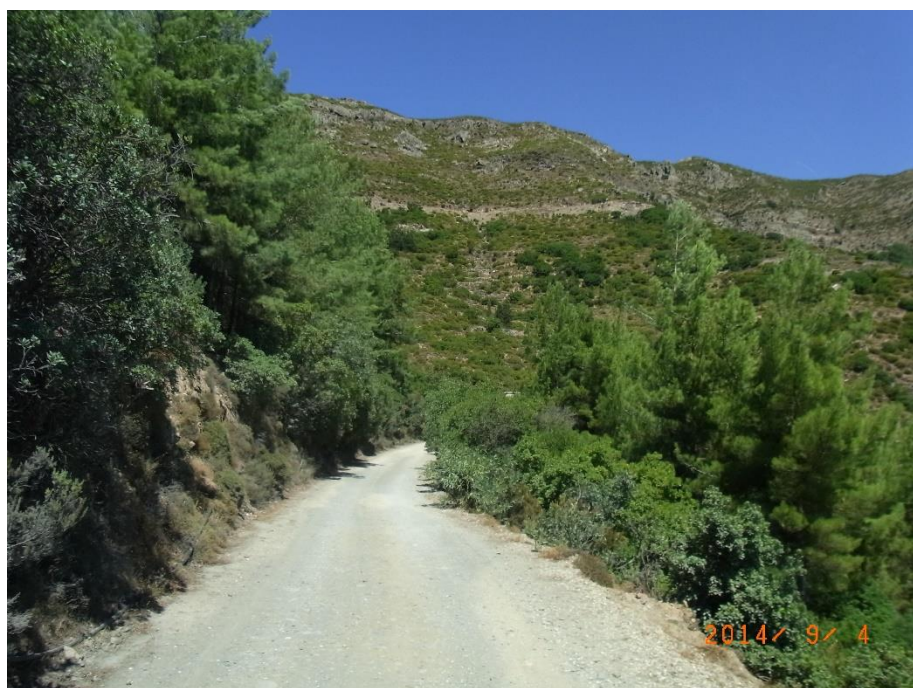


写真5) ミリアの手前4~5 kmは砂利道。これはミリアだけに通じる私道。アクセスは決して良くないが、欧州からの客足は全く絶えない

EU の地域発展支援プログラムへの申請が承認され、1991～94 年の 3 年間は同プログラムの資金でミリアのプロジェクトを進めることができました。ゲストハウスも 91 年まではこのような良好な状態ではなく、91 年以降 EU の支援があったからこそ、今のゲストハウスや施設の充実があるのです。すなわち、16 件のゲストハウスを作り上げ、先の「有刺鉄線柵」よりはるかに頑丈な防御柵を周囲に設置し、ふもとの村から自動車アクセスできるように車道（未だ舗装道路ではないものの）を整備することができました。この資金援助は、全費用のほぼ半額までに至ります<sup>3</sup>。

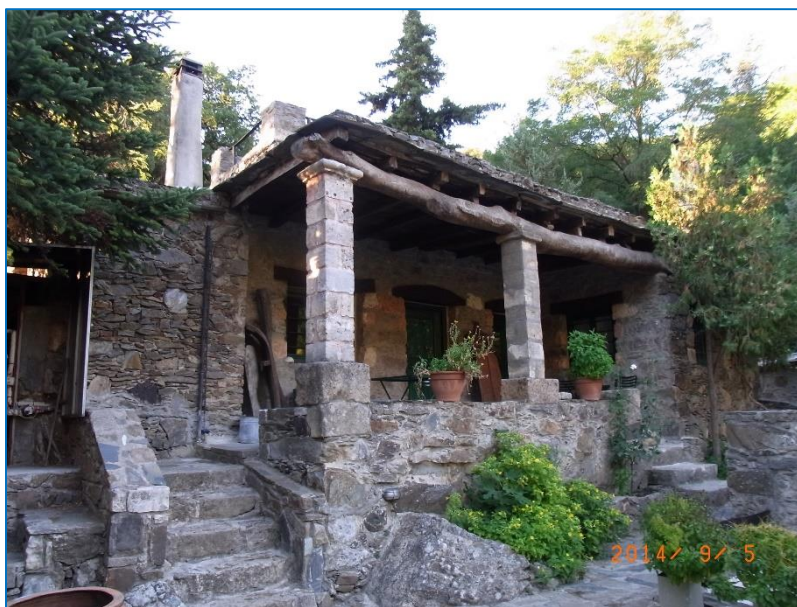


写真6) コテッジの1棟

しかし今思い返すと、1982 年にこの事業を始めた時点では、確かにヤコボス・ツルナキスが抱いていた「アグリツーリズム・エコツーリズムをこの地で実現しよう！」という理想があるにはありましたが、実にそれは具体的に緻密な計画の基に練られたものではなかったのです。かなりぼんやりとしたものでした。しかし、先述の EU プログラムへ正式申請するに至って、私たちは現地

の詳細な「環境調査」を行ったうえで「具体的な目的、完成図、そして収益を上げるビジネスモデル」を作成せねばなりません。そうやって初めて、本当の意味でのミリアの青写真が完成したのです。

申請後には EU の調査団がこの地を訪れ、私たちが過去 9 年間地道に取り組んできた修復・復元の成果などを視察したのです。その時、彼らは私たちの仕事に大変感銘を受



写真7) あるコテッジの客室内。左には暖炉(本物)の一部も見える

けた様子で、その後、短期間で承認に至りました。

実際には、ミリアは1994年に営業を開始しました。最初は、クレタ島内のギリシャ人観光客が殆どでしたが、1996～97年頃に現在の共同経営者であるタソス（ヤコボス・ツルナキスの娘婿）がこの地に来てくれて、ミリアの経営に携わってくれるようになりました。

### **私たちの「哲学」としては、**

- ① 「食材」にも「周囲の畑」にも化学薬品、化学肥料等を一切使用しない。
- ② 畑の雑草除去にも化学薬品等は一切使用しない。
- ③ 集落内および周囲の整備には、決してブルドーザーを用いない。
- ④ トラクターなど必要最小限の機械のみで作業を行う。
- ⑤ ゲストハウスおよびレストラン、厨房などすべての建物の石材はミリア現地のもの。また使用木材も現地のもので、製材作業さえもふもとの製材所へ依頼する訳ではなく、ミリアで手ずからノコギリを使い製材した。そしてその木材には化学的な腐食予防剤や照りを出すニス塗っていない。すべてオリーブオイルのみを塗り込んでいる。他のものは何もない。
- ⑥ 水道、電気をふもとから引かない。電気は太陽光発電のみ、水は山中の沢の水だけを使用する。
- ⑦ ゲストの食事への食材も極力自前の畑で収穫された有機農産物を提供。2010年頃までは、自前の食材のみでやっていたが、近年はゲストが大幅に増えたので、水不足の問題が顕著になってきた。そのため、ミリア周辺の自前の畑に送る灌漑水を少なくしたことから、食材の供給量が減少。結果、現在はふもとのヴラトス村周辺の畑から調達している。ヴラトスの方は、十分な水があり、広い畑も確保可能である。私の兄弟たちが生産者として働き、国から認定される「有機基準」をしっかりと守りながら、食材を提供してくれている。
- ⑧ 現在、水については、ゲスト用の水、そして



写真8) ミリア敷地内の畑の一部

厨房用の水、鶏や牛、馬の家畜用の水などを優先している。近年は、気候の変化からか、降水量は年々減少してきており、それが泉の水量の減少にも影響はしているのではないか？

- ⑨ 食べ残しのゴミなどは、鶏、牛、馬などの家畜の餌としており、エコサイクルを守っている。

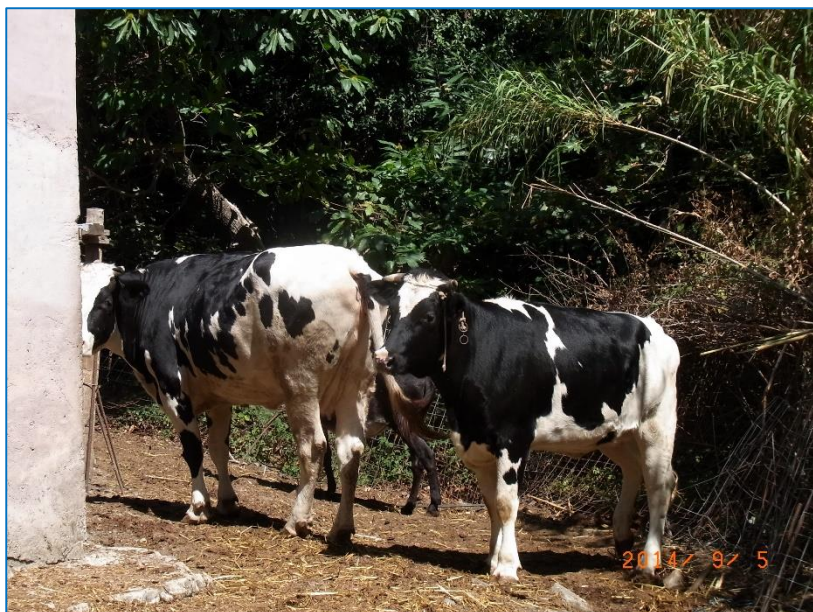


写真9) 敷地内に飼育される家畜(牛)。宿泊の食べ残しは家畜の餌に

⑩ 将来的にミリアは、現在の「16件」というゲストハウスの件数以上に、規模を拡大することはない。これ以上拡大すれば、周辺環境に影響は避けられないし、ゲストへのサービスも確実に劣化する。

⑪ 「環境を尊重し、ゲストへのサービスレベルを決して落とさない」そのバランスが最も重要である！ 元来、クレタには巨大ホテルは

必要ない。グレードの高い中小のホテルが適切な数あればよいと思う。

- ⑫ 例えば、ハニアから西の地域の美しい海岸沿いに、巨大なリゾートホテルが林立しているのは、私に言わせると「大きな間違い」である。
- ⑬ しかし、残念ながらどの国もそうだが、そういう大規模事業に対しては、国も後押しを拒まない。しかし、環境への多大な負荷を考えると、絶対にあるところで「ストップ！」は必要であると私は信じている。然るべき規制が必要である！
- ⑭ 私たちは、これ以上に規模を拡大することはないが、ミリアの「質」を向上させることを考えている。例えば今、中世からこの地域で使われている「石の器具」のオープンミュージアムを整備している途中であるが、そういった学びの場や、さらには近くに小さな石造りの円形音楽堂などを手掛けたいとも考えている。
- ⑮ 同様なアグリツーリズム拠点を他地域に展開したいとの希望から、ミリアに視察にくる人々も多い。我々はそれらに対しても積極的に公開し、協力している。ただ、その時に強調するのは「利益を追求してはいけない」「その地の環境への配慮は最優先である」ことなどである。
- ⑯ ただ、「環境への配慮」ばかりを強調すると、アグリツーリズム拠点の営業さえ控えた方がよい。そのようなロジックではなく、地域住民が生活していくための「一定の収





写真10) パンもすべて自家製。パンを焼くオーナーのマクラキスさん

にも教育されるべきだと思う。

- ⑱ 当然、このようなアグリツーリズム拠点がクレタやギリシャ全土にも展開してほしいが、しかし一方で私自身が長い間忍耐をもって積み上げてきたような努力を好む人々が少ないのは少々残念なことである。よりたくさんパイオニアが出てきてくれることを心から祈っている。

入・利益」を確保しながら、しかし「環境への配慮を怠らない」。そのバランスを考慮し、突き詰めた結果が「持続可能な発展」に他ならない！ 加えて、そのような中で地域住民が育っていけば、必ずや彼ら自身も将来地域の為に働く人材となってくれるはずである。

⑰ このような文化、思想、哲学が次の世代の子供たち、若者たち



写真11) レストランバルコニーでの朝食例(朝は、バイキング方式)

*The Philosophy of Sustainable Tourism Welling up  
at a Cretan Agri-tourism Accommodation “Milia Mountain Retreat”, Greece*  
Tohsei Ishimoto, Ph.D,

☆ インタビュー実施日：2014年9月5日

☆ 場所：ギリシャ クレタ島ハニア県 ミリア・マウンテンリトリート

☆ 翻訳者：石本東生

☆ 文責：石本東生

---

1 中世ヴェネツィア時代より繁栄するクレタ島西部の中心都市。ハニア県の県都でもある。

2 昔、特に貧困な農家では、漆喰は「土」だけであったが、それであれば壁に雨がしみこむと「土」が泥となって溶けだし、家屋が倒壊しやすいという危険性があった。

3 この支援プログラムは現在の“ESRF”：*European Strategic Reference Framework* 当時の“LEADERS”：*Liaison Entre Actions de Développement de l'Économie Rurale= Links between the rural economy and development actions* である。